

日韓語の動詞結合の形成過程と分類

— 「日韓語の動詞結合形成モデル」の構築を通して—

李 忠 奎*

(e-mail: ch4229@hanmail.net)

目 次

1. はじめに
 2. 日韓語の動詞結合
 3. 日韓語の動詞結合形成モデル
 4. 形成モデルから説明できる相違点
 5. まとめ
-

1. はじめに

日韓語には、動詞と動詞が結合した、所謂「動詞結合」が豊富に存在する。本稿では、これらの動詞結合がどのように形成され、どのように分類できるか、その形成過程や分類に焦点を当てて考察する。具体的には、動詞結合の形成過程と分類を操作手順の段階を想定して説明する「日韓語の動詞結合形成モデル¹⁾」を通して確認し、さらには、このモデルに基づいて分析することで、両言語間に見られる共通点と相違点が容易に把握できることも合わせて指摘する。本稿での試みは、日韓語の動詞結合の全体像を把握するために行うものである。

* 韓南大 学校、時間講師、対照言語学

1) 本稿のモデルは、2009年2月に北海道大学に提出した博士学位論文で構築したモデルを大幅に修正したものである。学位論文のモデルは、日韓語の動詞結合を実際に分析する途上で筆者が独自に着想したものであるが、明確な基準によって一貫した分類が行われていないという問題があったため、本稿では特にこの点について修正を加えた。なお「日韓語の動詞結合形成モデル」を略して「形成モデル」と呼ぶ場合がある。

2. 日韓語の動詞結合

本稿で言う「動詞結合」とは、文字通り、動詞と動詞が結合したものであり、具体的には以下のようなものを指す。

- (1)a. 帰って寝る、歩いて行く、煮て食べる、開けておく、食べている、飲んでみる、打って出る、食って掛かる、やってくる、…
- b. 噛み殺す、押し倒す、放り投げる、褒め称える、…
- (2)a. **삶아** 먹다, **먹어** 보다, **열어** 두다, **알아** 보다, **물고** 가다, **먹고** 있다, **주고** 받다, **깎아** 다 놓다, **넘어** 다 보다, …
- b. 오가다, 오르내리다, 여닫다, 무르익다, …

日韓語の動詞結合は、「介在要素(太字)の有無」という観点から「介在要素有りタイプ」(1a, 2a)と「介在要素無しタイプ」(1b, 2b)に大別することができる。さらに、V1とV2の結合度や意味的な統合(=意味変化)などの判別基準によって、以下のように、大きく「句」「補助動詞結合」「複合動詞」に下位分類することができる。なお、(3)と(4)は、(1)と(2)の例を用いて下位分類別に整理し直したものである。

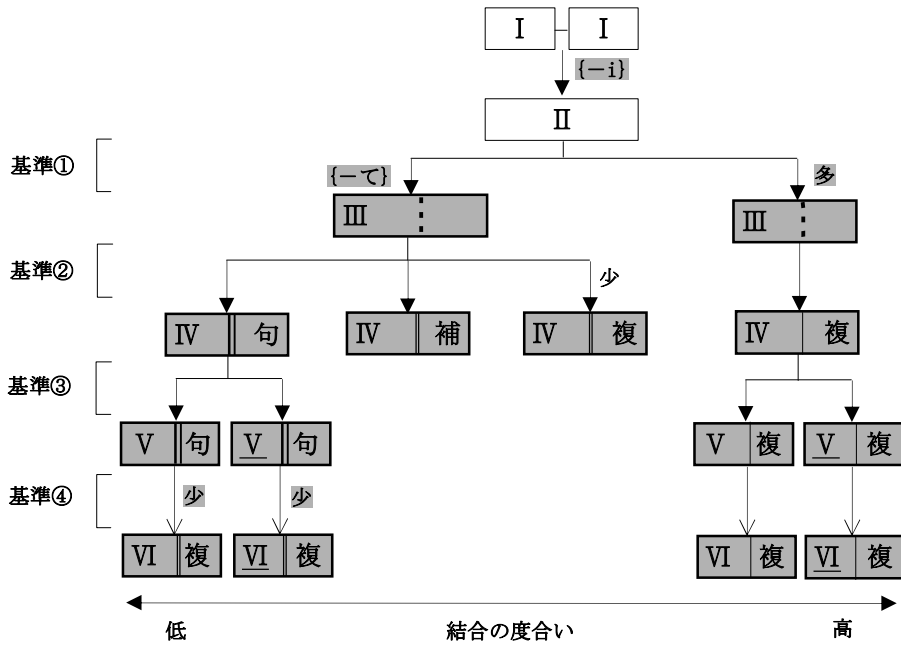
- (3)a. 帰って寝る、歩いて行く, **삶아** 먹다, **물고** 가다, … : 句
- b. 開けておく、食べている, **열어** 두다, **먹고** 있다, … : 補助動詞結合
- c. 打って出る, **알아** 보다, **주고** 받다, **넘어** 다 보다, … : 複合動詞
- (4) 噛み殺す、押し倒す, 오가다, 오르내리다, … : 複合動詞

このように整理し直して見ると、両言語とも「複合動詞」には「介在要素有りタイプ」(3c)と「介在要素無しタイプ」(4)の二種類が存在することがまず確認できるが、以上のことを踏まえた上で、以下「日韓語の動詞結合形成モデル」を提示し、日韓語の動詞結合がどのように形成され、どのように分類できるかをより詳細に見ていく。

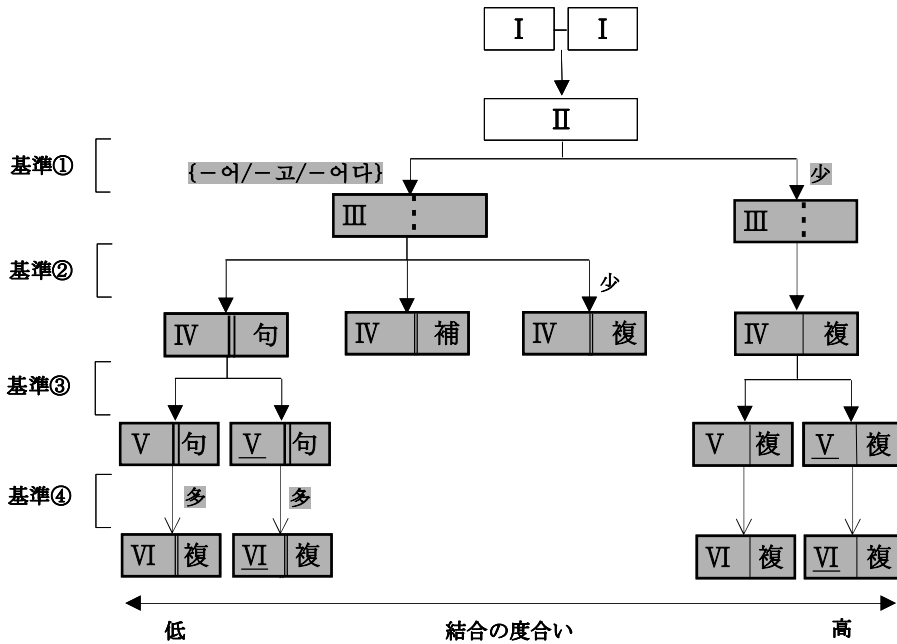
3. 日韓語の動詞結合形成モデル

本節では、日韓語の動詞結合形成モデルを構築する。まず、3.1.では日本語のモデルを提示し、次に、3.2.では韓国語のモデルを提示する。最後に、3.3.でモデルの見方について詳しく説明する。

3.1. 日本語の動詞結合形成モデル



3.2. 韓国語の動詞結合形成モデル



3.3. 形成モデルの見方と具体例

ここでは、具体例を挙げながら、形成モデルの見方について詳しく説明する。なお、本稿で構築するモデルは、実在する「動詞結合」のみを対象にするということをここで断っておく²⁾。

3.3.1. 第Ⅰ段階

第Ⅰ段階は、動詞結合を形成する最初の段階として、素材入力段階である。V1とV2になる動詞が「基本形」の形でそれぞれ独立して存在する。各aが「介在要素有りタイプ」の具体例であり、各bが「介在要素無しタイプ」の具体例である(以下、同様)。

- (5)a. 買う—出る / 飛ぶ—行く / 食べる—みる / 食う—掛かる
 b. 抜ける—落ちる / 噛む—殺す
 (6)a. 잡다—먹다 / 날다—가다 / 먹다—보다 / 알다—보다
 b. 오르다—내리다 / 무르다—익다

この際、二つの動詞の順序は関係ないものとする。例えば、(5a)の最初の例は「買う」が前の方に位置しているが、「出る」が前にあっても構わない。

3.3.2. 第Ⅱ段階

第Ⅱ段階は、どの動詞がV1になり、どの動詞がV2になるかということが決定された段階である。前段階と同様にここも準備段階として考える。V1は日韓語、共に「語幹³⁾」の形式を取る。但し、日本語では、V1に、所謂「子音語幹動詞」が現れる場合、「モーラ音素という例外を除けば、子音のみのモーラが存在し得ない」という形態音韻上の制約により、母音「i」を付加するという音韻処理がなされる(李(2009b, c))。

- (7)a. V1(kaw)—i—V2(出る) / V1(tob)—i—V2(行く) /
 V1(tabe)—V2(みる) / V1(kuw)—i—V2(掛かる)
 b. V1(nuke)—V2(落ちる) / V1(kam)—i—V2(殺す)
 (8)a. V1(잡)—V2(먹다) / V1(날)—V2(가다) /
 V1(먹)—V2(보다) / V1(알)—V2(보다)

2) 従って、本稿のモデルは、たとえば、「作る」と「食べる」の二つの動詞から「作って食べる」という「介在要素有りタイプ」の「句」が形成される過程については説明できても、なぜ「*作り食べる」という「介在要素無しタイプ」の「複合動詞」が存在しないのかについては説明できない。

3) 本稿における「語幹」の規定については李(2009b, c)に従う。ちなみに、日韓語の動詞は「語幹」が母音終わりなのか、子音終わりなのかによって、以下のように二分できる。括弧内の形態が各動詞の「語幹」である。

・母音語幹動詞：見る(mi)、食べる(tabe)、보다(bo)、때리다(ttaeli)、…
 ・子音語幹動詞：焼く(yak)、殴る(nagur)、굽다(gub)、먹다(meog)、…

b. V1(오르)—V2(내리다) / V1(무르)—V2(익다)

この段階で見られる音韻処理は、韓国語の方ではなされないものなので、両言語間で指摘できる最初の相違点となる。この点については、第4節で再び言及する。

3.3.3. 第Ⅲ段階

第Ⅲ段階は、第Ⅱ段階の各要素がそれぞれ結合する形態的完成段階である。この際、「介在要素の有無」という基準①によって、介在要素({-어} と {-어/-고/-어다}) が登場する「介在要素有りタイプ」(形成モデルの左側)と介在要素が登場しない「介在要素無しタイプ」(形成モデルの右側)とに二分される。なお、形成モデルの点線の境界線を以下では便宜上「#」で表示する。

- (9)a. Ⅲの買って#出る / Ⅲの飛んで#行く / Ⅲの食べて#みる /
 Ⅲの食って#掛かる
- b. Ⅲの抜け#落ちる / Ⅲの噛み#殺す
- (10)a. Ⅲの잡아#먹다 / Ⅲの달아#가다 / Ⅲの먹어#보다 /
 Ⅲの알아#보다
- b. Ⅲの오르#내리다 / Ⅲの무르#익다

ちなみに、日韓語ともに、動詞結合を形成する際に「音韻現象」が生じる場合があるが、その音韻現象はこの段階で確認することができる⁴⁾。

3.3.4. 第Ⅳ段階

第Ⅳ段階は、第Ⅲ段階の動詞結合に、以下の表にまとめた基準②を厳密に適用し、総合的な判断によって下位分類を行った段階である(「K」は「韓国語」の意)。

		句	補助動詞結合	複合動詞
形態レベル	介在要素の存在	義務	義務	任意
統語レベル	格支配による分類 ⁵⁾	I類(VV型)	(原則)II類(Vv型)	四パターン全て
	副詞などの挿入可否	可	不可	不可
	{-서}の挿入可否(Kのみ)	可	不可	不可
意味レベル	V2の本来の意味	保つ	後退する	語によって異なる

4) 日韓語の動詞結合に見られる「音韻現象」については、李(2010)を参照されたい。

5) 格支配による分類は、山本(1983、1984、1992)の分類を参考にした。同氏は、「格支配」を「動詞が名詞句に対して有する共起関係のこと」と定義し、格支配のあり方によって、日本語の「複合動詞」(本稿の「介在要素無しタイプ」に相当するもの)を以下のように四分類した。

結果的に、左側の「介在要素有りタイプ」は、大きく「句」「補助動詞結合」「複合動詞」と下位分類することができ(形成モデルの方では「句」「補」「複」となっている)、右側の「介在要素無しタイプ」は「複合動詞」とライセンスすることができる⁶⁾。

- (11)a. IVの買って出る(句) / IVの飛んで行く(句) / IVの食べてみる(補) /
IVの食って掛かる(複)
b. IVの抜け落ちる(複) / IVの噛み殺す(複)
(12)a. IVの잡아 먹다(句) / IVの날아 가다(句) / IV의 먹어 보다(補) /
IV의 알아 보다(複)
b. IV의 오르내리다(複) / IV의 무르익다(複)

3.3.5. 第 V・V 段階

第 V・V 段階は、第 IV 段階の動詞結合を「一つの動作であるか」という基準③によって二種類に大別した段階である。一つの動作であるかどうかは「V1してからV2」「V1하고 나서 V2」との置き換え可否によって判断する。両タイプともに、左側の方に二つの動作であるものを位置させ(「句の第 V 段階」と「複合動詞の第 V 段階」)、右側の方に一つの動作であるものを位置させる(「句の第 V 段階」と「複合動詞の第 V 段階」)。

- (13)a. IV의 買って出る(句) → V의 買って出る(句) /
IV의 飛んで行く(句) → V의 飛んで行く(句)
b. IV의 抜け落ちる(複) → V의 抜け落ちる(複) /
IV의 噛み殺す(複) → V의 噛み殺す(複)
(14)a. IV의 잡아 먹다(句) → V의 잡아 먹다(句) /
IV의 날아 가다(句) → V의 날아 가다(句)
b. IV의 오르내리다(複) → V의 오르내리다(複) /
IV의 무르익다(複) → V의 무르익다(複)

例えば、(14a)の例を挙げると、「(고양이가 쥐를) 잡아 먹다」の場合は「(고양이가 쥐를) 잡고 나서 먹다」のように置き換えることができるので、二つの動作に該当

- ・I類：洋子が泣き疲れる。(←洋子が泣く/洋子が疲れる)
- ・II類：良子が空を見上げた。(←良子が空を見た/*良子が空を上げた)
- ・III類：災難が打ち重なった。(←*災難が打った/災難が重なった)
- ・IV類：田中氏が失敗を繰り返した。(←*田中氏が失敗を繰り返した/*田中氏が失敗を返した)

本稿では、同氏の分類の仕方を「句」と「補助動詞結合」にも適用させて分析した。なお、より分かりやすくするために、各類を「I類(VV型)」「II類(Vv型)」「III類(vV型)」「IV類(vv型)」のように書き直した。

6) 「句」と「補助動詞結合」は、両方とも介在要素の存在を「義務」とするので、介在要素のない右側の第 IV 段階は「複合動詞」としてライセンスしてよいのである。

し、左側の「句の第Ⅴ段階」に分類される。一方、「(철새가) 날아 가다」の場合は、「(철새가) 날고 나서 가다」のように置き換えることができないので、「날아 가다」全体を一つの動作と見るべきであり(加藤(2003: 27~28))、従って、分類としては右側の「句の第Ⅴ段階」に属される。

なお、「介在要素有りタイプ」において「補助動詞結合」の第Ⅳ段階と「複合動詞」の第Ⅳ段階は、基準③による分類がなされていないが、前者の場合は「補助動詞結合」の例の中には二つの動作と見るべきものが存在しないからであり、後者の場合は今のところ、該当する例が見つからないからである。

さて、先行研究の中には、句の第Ⅴ段階に分類される例を1語である「複合動詞」として扱うものがある。たとえば、황병순(1986: 191~192)は以下の例文を挙げた後、「뛰어가다」(同氏の表記)が「複合動詞」とであると断言した。

(15) 나는 급히 병원에 뛰어갔다. (황병순(1986: 191))

しかし、当該の例を「複合動詞」として断定することには問題があると指摘せざるを得ない。なぜなら、以下の操作から分かるように、境界部を分離することができるからである。

(16)a. 나는 병원에 뛰어서 갔다.
 b. 나는 병원에 뛰어서 급히 갔다.

(16a)は、韓国語の「複合動詞」の内部には挿入することができないと言われている⁷⁾ {—서} が、また、(16b)は、さらにV2だけを修飾する「급히」という副詞が境界部を分離している。これらは、影山(1993、1999、2006)などが言う「語の形態的緊密性⁸⁾」に違反するものであり、従って、上記の操作が可能な例を1語である「複合動詞」として認定するには問題がある。ただ、これは形態・統語的な面をより重視した分析であり、意味的な観点からすると、当該の例も先の「날아 가다」のように、全体が一つの動作と見るべきなので、そういった意味では1語としての認定も有り得る。しかし、ある動詞結合が「複合動詞」であるかどうかを判別する際に、一つの観点だけで判断するのは決して望ましいことではない。問題の「뛰어 가다」の場合は、先の基準②を厳密に適用すると、「複合動

7) 김기혁(1996) 김창섭(1981、1996) 남기십(1994) 서정수(1992、1996) 손세모들(1996)·이관규(1994)などを参照されたい。

8) 影山(1993: 76)は、「或る表現が語かどうかを判断する際に信頼できる基準は、語の形態的緊密性という性質である。語は形態的なまとまりを構成するから、その内部に統語的な要素を介在させることは許されない」と指摘している。また、影山(2006: 6)は、「一般的に、語(word)という言葉単位は、その内部に統語的な要素によって分断されないという形態的緊密性を備えている。形態的緊密性を見極めるテストにはいろいろなものがあるが、最も分かりやすいのは、内部に副詞が介在できるかどうかである」と指摘している。

詞」として分類するよりは「句」として分類するほうがより妥当であると判断され、この点は、日本語の「走って行く」も同じである。

3.3.6. 第 VI・VI 段階

第 VI・VI 段階は、第 V・V 段階の動詞結合を「意味的な統合(=意味変化)」という基準④によって二種類に大別した段階である。この際、左側の「介在要素有りタイプ」の場合は、意味的な統合(=意味変化)によって「句」から「複合動詞」への転換が行われる。

- (17)a. Vの(店を、煙草を)買って出る(句) → VIの(幹事を)買って出る(複) /
 Vの(渡り鳥が)飛んで行く(句) → VIの(お金が)飛んで行く(複)
 b. Vの(髪の毛が)抜け落ちる(複) → VIの(肝心の点が)抜け落ちる(複) /
 Vの(猫がねずみを)噛み殺す(複) → VIの(あくびを)噛み殺す(複)
- (18)a. Vの(고양이가 쥐를) 잡아 먹다(句) → VI의(시간을) 잡아먹다(複) /
 V의(철새가) 날아 가다(句) → VI의(전 재산이) 날아가다(複)
 b. V의(계단을) 오르내리다(複) → VI의(남의 입에) 오르내리다(複) /
 V의(감미) 무르익다(複) → VI의(분위기가) 무르익다(複)

例えば、(17a)の「飛んで行く」の場合、「渡り鳥が飛んで行った」のように用いられると、「渡り鳥が飛んで、西の方に行った」のような操作が可能なので、「句」の第 V 段階に分類されるが、「お金が飛んで行った」のように用いられると、お金が実際飛んで、どこかに行ったという解釈ではなく、お金が無くなったという解釈になるので、比喩的な意味を獲得した第 VI 段階の「複合動詞」として認めることができる。このように、ここでは「句」から「複合動詞」への転換という段階を想定することができるが、日本語にはここに該当する例が少数しかないので、韓国語には数多くあるという相違点が見られる。この点については、第 4 節で「複合動詞の分布の違い」という観点から再び言及する。

なお、第 V・V 段階に属する動詞結合の中には、例えば「帰って寝る」「歩いて行く」「殴り殺す」「끓여 먹다」「타고 가다」「뛰놀다」などのように、V1と(介在要素と)V2の単なる和の意味しかなく、変化した意味を持たないものも有り、このような例は第 V・V 段階の時点でその形成過程を終了し、第 VI・VI 段階へは進行しない。結論的に、第 V・V 段階に属するものの一部だけが第 VI・VI 段階にまで行くことになるが、このことを形成モデルの方では矢印を区別することによって表わした。

3.3.7. その他

以上、第 I 段階から第 VI・VI 段階までの過程を順番に説明したが、ここでは、まだ言及していない枠内の「境界線」について説明する。境界線の種類と位置、また、それらの

意味を簡単に表にまとめると、以下のようになる。

	種類	介在要素	位置	意味
①	点線	有り・無し	第Ⅲ段階	臨時的なもの
②	太い二重実線	有り	句の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ段階	副詞などの挿入可
③	細い二重実線	有り	補助動詞結合の第Ⅳ段階 複合動詞の第Ⅳ・Ⅵ・Ⅵ段階	副助詞などの挿入可
④	細い実線	無し	複合動詞の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅵ段階	如何なる要素も挿入不可

表を見れば分かるように、境界線は全部で四つの種類がある。以下、具体例を挙げながら、もう少し詳しく説明する。

まず、第Ⅲ段階にある「点線」は、境界線としては「臨時的なもの」である。この段階では、動詞結合として形態的には完成してあるが、「句」なのか、「補助動詞結合」なのか、それとも「複合動詞」なのかといった動詞結合の下位分類がまだ確定されていないため、具体的な境界線の意味を付与することができない。従って、この段階の境界線は「臨時的なもの」として設定しておく。

次に、「句」の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ段階にある「太い二重実線」は、「境界部に比較的に自由に副詞のようなものを挿入することができる」ということを意味する。

- (19)a. とても疲れていたので、家に帰ってそのまま寝ることにした。
- b. 歩いてゆっくり行ったにもかかわらず意外と前のナイスポジションを取ることができて、間近でパフォーマンスを観ることができました。(web)
- (20)a. 들이서 회에다, 매운탕까지 끓여 맛있게 먹었다.(web)
- b. 그곳에서 국경까지는 택시를 타고 편하게 갔다.(web)

(19)と(20)の動詞結合は、前述の「句」の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ段階に属する例であるが、見て分かるように、境界部に副詞のような要素の挿入を許容する。この場合、境界部に挿入された要素は主にV2を修飾する働きをするが、このような機能を持つ要素は、「補助動詞結合」と「複合動詞」の境界部には許されない。従って、副詞のような要素による境界部の分離可能性は、「句」を判別するための重要な基準となる。

次に、「補助動詞結合」の第Ⅳ段階と「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」の第Ⅳ・Ⅵ・Ⅵ段階にある「細い二重実線」は「境界部に {－は} とか {－도} {－만} {－를} などの一部の要素を挿入することが可能な場合がある」ということを意味する。

- (21)a. 雲丹もイクラもカンパチも食べてはみたけど、私の口には合わなかった。
- b. 수많은 삼겹살집들을 다녀도, 보고 먹어도 보았습니다만, 이렇게 맛있는 삼겹살은 처음이었습니다.(web、引用者による一部修正)

- (22)a. さて、列車とバスを乗り継ぎ、市内までやっ**て**は来たが、北も南も分からないのでウロウロしてみる。(web)
- b. 일이 있어서 청주에 갔다가 서울로 올라오려고 표를 끊으러 왔습니다. 근데 여직원이 돈만 세고 있고 손님이 와도 쳐다볼 **보**지 않더군요. 한참을 쳐다보다가 인기척을 내자 멀뚱멀뚱하게 한번 쳐다**만** 보더군요.(web)

(21)の「食べてみる」「다녀 보다」「먹어 보다」は「補助動詞結合」の例であり、(22)の「やってくる」「쳐다보다」は「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」の例であるが、これらは、境界部に {－は} {－도} {－만} {－를} の挿入を許容している。このように、「補助動詞結合」と「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」は、一部の要素による境界部の分離可能性を認めることができる⁹⁾。

最後に、「介在要素無しタイプ」の「複合動詞」の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ段階にある「細い実線」は「境界部に如何なる要素の挿入も許容しない」ということを意味する。

- (23)a. *けなしたりもするけど、めっちゃめっちゃ褒め**も**称える。
- b. *하루에 몇 번씩 계단을 오르**만** 내리면 운동이 된다.

(23)の「褒め称える」と「오르내리다」は、典型的な「介在要素無しタイプ」の「複合動詞」として挙げることができるが、見て分かるように、境界部に {－も} {－만} の挿入を許容しない。他の要素も同様で、「褒め称える」「오르내리다」の境界部を分離できるものは存在しない。このことは、V1とV2が極めて緊密に結ばれているから見られる現象であり、「介在要素有りタイプ」の場合と区別される「介在要素無しタイプ」の大きな特徴となる。ちなみに、(23)は、以下のように「動詞結合の名詞形＋挿入要素＋する」

9) 一部の要素による境界部の分離可能性に関しては、少なくとも以下の二点についても考察する必要がある。

①その一部の要素とは具体的に何か。

②全ての「補助動詞結合」と「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」は、一部の要素による境界部の分離を許容するか。

①は、一部の要素をより明確に提示することである。上記では、便宜上 {－は} {－도} {－만} {－를} だけを提示したが、どういった要素が境界部を分離するか、また、それら一部の要素においては、両言語間にどのような類似と相違があるか、などを明確に把握するためには、他の要素も具体的に提示する必要がある。今までの観察からすると、韓国語の {－을(를)} は境界部を分離することが可能であるが、日本語の {－を} はそれができない。これは大変興味深い違いである。②は、一部の要素によっても境界部が分離できない例を特定しようとするものである。「補助動詞結合」と「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」なら、原則として境界部が一部の要素によって分離できると思われるが、たとえば、「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」である「후려치다」の場合、「한대 후려**는** 찢는데」「한대 후려**도** 찢고」「한대 후려**만** 치면」「한대 후려를 찢는데」のような言い方はしないことから考えると、一部の要素による境界部の分離を許容しない例も存在することが予想できる。どういった特徴を持つ例が境界部の分離を許さないのか、ということも十分考察する価値があるだろう。この二点に関しては機会を改めて詳しく論じたい。

の形式を取れば容認可能な文として成立する(伊藤・杉岡(2002:133))。

- (24)a. けなしたりもするけど、めっちゃめっちゃ褒め称えもする。
 b. 하루에 몇 번씩 계단을 오르내리기만 하면 운동이 된다.

以上、ここでは、第Ⅲ段階から見られる境界線がどういう意味を持っているのかについて説明した。主に、他の要素の挿入による境界部の分離可能性を指摘したのであるが、ここで注意していただきたいことは、「境界部にある要素を挿入することができる」と「V1を他の表現に置き換えることができる」ことは区別すべきであるということである。影山(1993、1999)は「押し倒す」「食べ過ぎる」などのような日本語の「V+V」型複合動詞を「A類(語彙的複合動詞)」と「B類(統語的複合動詞)」に二分したが、その際に根拠として提示したのが、①代用形「そうする」、②主語尊敬語、③受身形、④サ変動詞、⑤重複構文の現象がV1に見られるかどうかという基準である。以下のように、この五つの現象がV1に見られなければA類になり、見られればB類になるという分類である。

- (25)a. 押し開ける→*そう開ける / 食べ過ぎる→そう過ぎる
 b. 書き込む→*お書きになり込む / 歌い始める→お歌いになり始める
 c. 書き込む→*書かれ込む / 呼び始める→呼ばれ始める
 d. 貼り付ける→*付着し付ける / 見続ける→見物し続ける
 e. 待ち構える→*敵を待ちに待ち構えた / 鍛え抜く→鍛えに鍛え抜かれた身体

この際、注意を要するのは、例えば、(25c)の「呼ばれ始める」という形態を「呼び始める」の内部に「られる」を挿入したものと解釈してはいけないという点である。「呼び始める」の内部に「られる」を挿入して作り出せる形態は「*呼びられる始める」であって、「呼ばれ始める」ではない。「呼ばれ始める」は、V1に「呼ぶ」の受身形が立っているので、見かけ上「呼び始める」のV1「呼び」が「呼ばれ」に置き換えられたものに過ぎず、決して「呼び始める」の境界部に「られる」を挿入したものではない。「呼ばれ始める」は「呼ばれる」と「始める」の結合としてそれ自体で一つの「複合動詞」と見るべきである。先に、境界部にある要素を挿入する操作は、V1とV2をそのままの形で固定して行うものであるので、「呼び始める」と「呼ばれ始める」のように、V1を別の形態で単純に置き換えるのとは操作自体が異なる。従って、「境界部にある要素を挿入することができる」と「V1を他の表現に置き換えることができる」ことは明確に区別しなければならない。

以上、本節では、具体例を挙げながら「日韓語の動詞結合形成モデル」の見方について詳しく説明した。見て分かるように、日韓語の動詞結合は共通する部分が多く、形成過程や分類方法が基本的には同じであると考えてよい。ただ、共通する部分が多いとは言っても、日本語と韓国語は同じ言語ではないので、相違点も当然見られる。次節で

は、日韓語の動詞結合に見られる相違点を指摘する。

4. 形成モデルから説明できる相違点

本節では、形成モデルから説明できる相違点について指摘する。上記のモデルから確認できる相違点としては、以下の四点が挙げられる。

- (26)a. 日本語の母音「i」の存在
 b. 介在要素の数
 c. 「介在要素無しタイプ」の「複合動詞」の数の違い
 d. 「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」の数の違い

以下、各相違点について個別に見ていく。ただし、(26c)と(26d)は、共に「複合動詞」の数に関する指摘なので、「複合動詞の分布の違い」というタイトルで一括して論じる。

4.1. 日本語の母音「i」の存在

まず、最初の相違点は、第Ⅰ段階から第Ⅱ段階への過程で観察される。日本語の母音「i」の存在がそれである。この母音「i」については既に言及したが、本稿においては重要なポイントになるので簡単に再確認する。

日本語は、第Ⅱ段階で、たとえば「押す」のような「子音語幹動詞」がV1として決定された場合、(27b)のように、母音「i」の挿入を必要とする。

- (27)a. 押す—倒す ←第Ⅰ段階
 b. V1(os)—i—V2(倒す) ←第Ⅱ段階
 c. 押して#倒す ←第Ⅲ段階(左側)
 d. 押し#倒す ←第Ⅲ段階(右側)

もし、第Ⅱ段階で「子音語幹動詞」がV1として決定されたにもかかわらず、母音「i」が挿入されなかった場合、第Ⅲ段階では「押して倒す(ositetaosu)」が(28c)のような形となり、「押し倒す(ositaosu)」が(28d)のような形になって、深刻な問題が生じる(第2モーラ目が子音のみになっていることを確認されたい。3.3.2.を参照)。

- (28)a. 押す—倒す ←第Ⅰ段階
 b. V1(os)—V2(倒す) ←第Ⅱ段階

- c. *o/s/te#ta/o/su ←第Ⅲ段階(左側)
- d. *o/s/#ta/o/su ←第Ⅲ段階(右側)

従って、日本語の母音「i」は、V1に「子音語幹動詞」が現れる場合、その登場が義務的になる。それに比べて、韓国語の場合は、第Ⅱ段階で「돌다」のような「子音語幹動詞」がV1として決定された場合でも挿入する要素を必要としない。

- (29)a. 돌다—보다 ←第Ⅰ段階
- b. V1(돌)—V2(보다) ←第Ⅱ段階
- c. 돌아#보다 ←第Ⅲ段階(左側)
- d. 돌#보다 ←第Ⅲ段階(右側)

このように、日韓語の動詞結合の間には、V1に「子音語幹動詞」が現れる場合、ある特定の母音を必要とするかという点において相違が見られるが、この違いはV1を従来の研究のように「連用形」と分析するのではなく、本稿のように「語幹」と分析することによってはじめて指摘可能なものである。ちなみに、V1に「母音語幹動詞」が現れる場合は、日韓語ともに、第Ⅱ段階において義務的に挿入される要素を必要としない。

- (30)a. 見る—回る ←第Ⅰ段階
- b. V1(mi)—V2(回る) ←第Ⅱ段階
- c. 見て#回る ←第Ⅲ段階(左側)
- d. 見#回る ←第Ⅲ段階(右側)
- (31)a. 오다—가다 ←第Ⅰ段階
- b. V1(오)—V2(가다) ←第Ⅱ段階
- c. 오고#가다 ←第Ⅲ段階(左側)
- d. 오#가다 ←第Ⅲ段階(右側)

4.2. 介在要素の数

二つ目の相違点は、第Ⅱ段階から左側の第Ⅲ段階への過程で観察される。そこを見ると、日本語では {ーて} が介在するようになっていて、韓国語では {ー어/ー고/어다} が介在するようになっている。両言語間には介在要素の数において1対3という相違があることになる。それぞれの異形態、すなわち、日本語の {ーで} と韓国語の {ー아/어} {ー아다} も入れて数えると(李(2009c))、2対6となる。これはごく単純な指摘に過ぎないが、一つの相違点として挙げることはできよう。

上記の形成モデルからでは把握することができないが、介在要素と関連してもう一つの相違点を指摘する。

- (32) 日本語にはタイプを問わずに対義語同士が結合して「複合動詞」として認められる例は見られないが、韓国語には両タイプとも対義語同士が結合して「複合動詞」として認められる例が見られる。

この指摘は、以下の例の成立可否を反映したものである。各aが「介在要素有りタイプ」の例であり、各bが「介在要素無しタイプ」の例である。

- (33)a. *太郎は彼女と5年間も手紙をやっ^て取っている。
 b. *お父さんは毎日のように山に上り下りた。
 (34)a. 타로는 그녀와 5년간이나 편지를 주^고받고 있다. (李(2008: 68))
 b. 아버지는 매일같이 산에 오르내렸다. (『연세』(1998: 1336))

(33a)と(34a)、(33b)と(34b)は、それぞれ全く同じ文脈で対義語関係にある動詞を用いて「複合動詞」を作り出すことができるかというテストを行ったものであるが、韓国語の方は問題なく作り出せるのに対して、日本語の方は作り出せない。この場合、日本語では、適格な文として成立させるために「やり取りする」「上り下りする」のように「名詞+する」という形式を取る必要がある(李(2008))。この言語事実を踏まえた上で、(33a)と(34a)の囲み線で表示した介在要素に焦点を当てると、両言語間では以下の相違点が指摘できる。

- (35) 日本語の {一て} は、対義語同士が結合する「複合動詞」の形成に関与しないのに対して、韓国語の {一고} は、対義語同士が結合する「複合動詞」の形成に関与する。

日本語においても、たとえば「行っ^て来る」(「句」)のような動詞結合が存在するので、{一て} が対義語同士の結合に全く関与しないわけではないが、その関与はあくまでも「句」レベルにとどまり、「語」(「複合動詞」)レベルまではいかない。これに比べて、韓国語の {一고} は、(34a)の例から分かるように「語」(「複合動詞」)レベルにまで関与する。

日本語の {一て} と韓国語の {一어} {一고} {一어다} が機能の面でどういう共通点があり、どういう相違点があるのか、その相互関係については綿密な検討を要するが、少なくとも {一て} と {一고} の間に見られる(35)の相違点は、日韓語の動詞結合に関する対照研究を行う際に重要なポイントになるだろう。なお、日韓語の対義語同士の動詞結合については、李(2008)の分析があるので参照されたい。

4.3. 「複合動詞」の分布の違い

三つ目の相違点として指摘できるのは、「複合動詞」の数の違いである。既に指摘したように、日韓語には二種類の「複合動詞」すなわち、「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」と「介在要素無しタイプ」の「複合動詞」とがあるが、数という点で分布上における相違が見られる。その概略を表にまとめると、以下のようになる。

	日本語の「複合動詞」	韓国語の「複合動詞」
介在要素有りタイプ	少ない	かなり多い
介在要素無しタイプ	圧倒的に多い	少ない

この指摘を参考にすると、日韓語の「複合動詞」については、以下のような結論が得られる。

- (36) 日本語の「複合動詞」は、形態構造上、主に「介在要素無しタイプ」の形で形成されるのに対して、韓国語の「複合動詞」は、形態構造上、主に「介在要素有りタイプ」の形で形成される。(李(2009b: 30))

日韓語の動詞結合の中で、特に「複合動詞」に焦点を当てて対照研究を行う際は、まず、(36)の指摘を抑えておく必要がある。

さて、(36)の相違によって当然の結果のように生じる違いが二点ある。一つは「複合動詞」に関する研究を行う際に、通常、日本語では「介在要素無しタイプ」の「複合動詞」を対象にするのに対して、韓国語では「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」を対象にすること、もう一つは一点目の相違点と連動するが、日本語の場合、「介在要素無しタイプ」の「複合動詞」を考察する際は、同一の形態構造を持つ「句」と「補助動詞結合」が存在しないので特に判別問題が生じないが、韓国語の場合は、「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」を考察する際に、同一の形態構造を持つ「句」と「補助動詞結合」が存在するため、最初にぶつかるのがその判別問題であるということである。この判別に関わる問題は、特に韓国語の方で議論のテーマとして挙げられることが多いが、その背景にはこのような事情があるわけである¹⁰⁾。

10) では、なぜ、日韓語の動詞結合(の中の「複合動詞」)の間には、(36)のような相違が生じるのだろうか。その根本的な原因は、日韓語の動詞における「語幹の自立度」の違いにあると考えられるが、この点に関しては、李(2009b)が指摘しているので参照されたい。両言語の動詞の語幹の自立度については、機会を作ってより詳細な検討を行う予定である。

5. まとめ

以上、本稿では、両言語の動詞結合がどのように形成され、どのように分類できるか、その形成過程や分類を「日韓語の動詞結合形成モデル」を構築することによって把握しようと試みた。本稿での試みは、日韓語の動詞結合の全体像を把握するために行ったものであり、これに基づいて分析することで、両言語間で見られる共通点と相違点が容易な形で指摘できたと思われる。

本稿で構築したモデルは、日韓語の動詞結合を実際に分析する途上で、筆者が独自に着想したものであり、より高い説明力のあるモデルとするには緻密な修正を加える必要があるが、両言語間の差異を踏まえて共通のモデルを創出した点は、今後の対照研究にとっても意義のあるものと思われる。

本稿のモデルは、明確な基準によって一貫した分類を行ったという点で、李(2009a)のモデルをより精密化することはできたが、まだ不完全なものであり、更なる修正を要する。その際に考慮すべき点としては、「介在要素有りタイプ」の下位三分類はそれでいいのか、基準③はそれで十分なのかなどを含めて数多くあるが、今後、これらの課題を一つ一つクリアしていく予定であり、ゆくゆくは「より多くの共通点と相違点をよりシンプルな形で」対照可能とするモデルを目指したい。

【参考文献】

- 김기혁(1996) 「국어 합성동사 생성의 통사·의미학적 해석」 『국어국문학』 116, 1~37, 국어국문학회
- 김창섭(1981) 「現代國語의 複合動詞 研究」 『國語研究』 47, 國語研究会
——(1996) 『국어의 단어형성과 단어구조 연구』 국어학회
- 남기심(1994) 『국어연결어미의 쓰임』 서광학술자료사
- 서정수(1992) 『국어 문법의 연구Ⅱ』 한국문화사
——(1996) 『수정 증보판 국어문법』 한양대학교출판원
- 손세모(1996) 『국어 보조용언 연구』 한국문화사
- 연세대학교 언어정보개발연구원(1998) 『연세한국어사전』 두산동아

- 이관규(1994) 「합성동사의 구성에 관한 고찰」 『한국어학』 1, 365~387, 한국어학 연구회
- 황병순(1986) 「국어 복합동사에 대하여」 『한민족어문학』 13, 191~203, 한민족어 문학회
- 李忠奎(2008) 「日韓語の複合動詞形成システムの相違—対義語同士の組み合わせを中心に—」 『国語国文研究』 134, 1~17, 北海道大学国語国文学会
- (2009a) 「日韓語の動詞結合に関する対照研究」 北海道大学大学院文学研究科提出学位論文
- (2009b) 「日韓語の動詞結合の対照研究—「食べる／먹다」をV2とする例を中心に—」 『日本文化学報』 第41輯, 17~38, 韓国日本文化学会
- (2009c) 「形態レベルからみた日韓語の動詞結合—「連用形」「語基」「語幹」を適用した形態構造分析—」 『日本語文学』 第43輯, 89~117, 韓国日本語文学会
- (2010) 「音韻レベルからみた日韓語の動詞結合—音韻現象の分析を通して—」 『日本文化学報』 第45輯, 25~46, 韓国日本文化学会
- 伊藤たかね・杉岡洋子(2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社
- 影山太郎(1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版
- (2006) 「外項複合語と叙述のタイプ」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編 『日本語文法の新地平1 形態・叙述内容編』 1~21, くろしお出版
- 加藤重広(2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 山本清隆(1983) 「複合語の構造とシンタクス」 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究—5』 316~380, 情報処理振興事業協会技術センター
- (1984) 「複合動詞の格支配」 『都大論究』 第21号, 32~49, 東京都立大学国語国文学会
- (1992) 「第Ⅲ部 複合動詞辞書 複合動詞結合情報付き動詞辞書作成の試み」 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究—11』 419~512, 情報処理振興事業協会技術センター

要 旨

本稿では、日韓語の「動詞結合」がどのように形成され、どのように分類できるか、その形成過程や分類を「日韓語の動詞結合形成モデル」を構築することによって把握しようと試みた。当該のモデルは、動詞結合の形成過程と分類を操作手順の段階を想定して説明するものであり、①各々の動詞が基本形の形で独立して存在する第Ⅰ段階、②どの動詞がV1になり、どの動詞がV2になるかが決定される第Ⅱ段階、③第Ⅱ段階の各要素がそれぞれ結合し、形態的に動詞結合が完成する第Ⅲ段階、④第Ⅲ段階の動詞結合を下位分類する第Ⅳ段階、⑤第Ⅳ段階の動詞結合を二種類に大別する第Ⅳ・Ⅳ段階、⑥第Ⅳ・Ⅳ段階の動詞結合を更に二種類に大別する第Ⅵ・Ⅵ段階の全6段階になっている。各段階ごとに同一の基準が適用されているので、日韓語の動詞結合は、その形成過程や分類が基本的には同じであることを確認することができる。一方、日韓語の動詞結合の間に見られる相違点として、①日本語の母音「i」の存在、②介在要素の数の違い、③複合動詞の分布の違いの三点も形成モデルを通して確認し、これらは日韓語の動詞結合に関する対照研究を行う際に重要なポイントになるということも合わせて指摘した。

キーワード：動詞結合、形成モデル、複合動詞、句、補助動詞結合、語幹

투 고 : 2010. 8. 31
1차 심사 : 2010. 9. 11
2차 심사 : 2010. 9. 25